

行列分解

宗政一舟

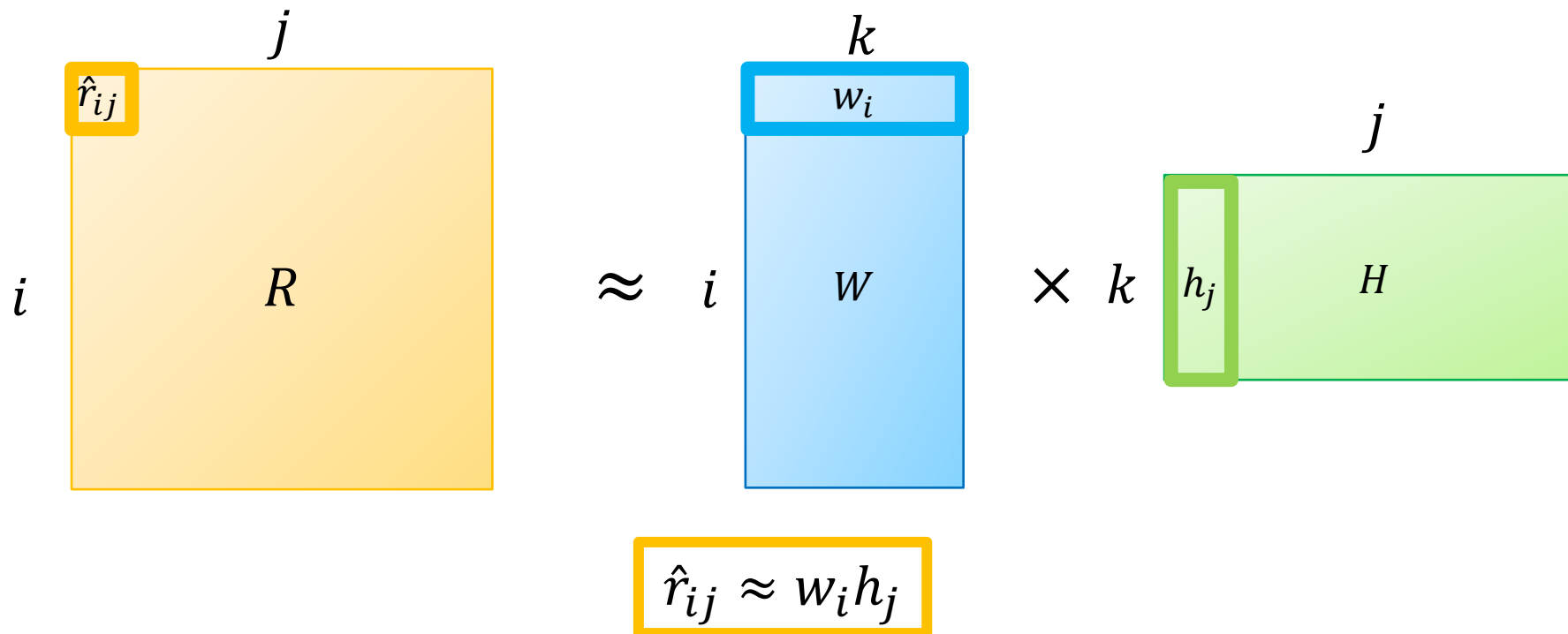
もくじ

1. 行列分解とは
2. 自然言語処理では
3. 行列分解の例
 1. 確率的勾配降下法(SGD)
 2. 非負値行列分解(NMF)
 3. 特異値分解(SVD)
4. 欠損値の扱い

1.行列分解とは

行列分解とは

- 高次元の行列がある時にデータスパースネスが発生してしまうことがある
- 行列 R を行列 W と行列 H に分解することでこの問題の解決する



今回

- 紹介する行列分解
 1. 確率的勾配降下法(SGD)
 2. 非負値行列分解(NMF)
 3. 特異値分解(SVD)
- 細かい証明などはやらず、具体的にどのようにやるかが中心

2. 自然言語処理では

自然言語処理では

- 例えば、ある商品レビューの[レビュー × 語彙] 行列を作成したい
- レビュー数が増えたら語彙数も爆発的に増える可能性がある → 行列分解

レビュー 1 : I have a very good time .
レビュー 2 : I do not like this goods.
レビュー 3 : I want to buy this again.

[レビュー × 語彙] 行列 作成

	I	have	a	very	good	time	do	not	like	this	goods	want	to	buy	again
レビュー 1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
レビュー 2	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0
レビュー 3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1

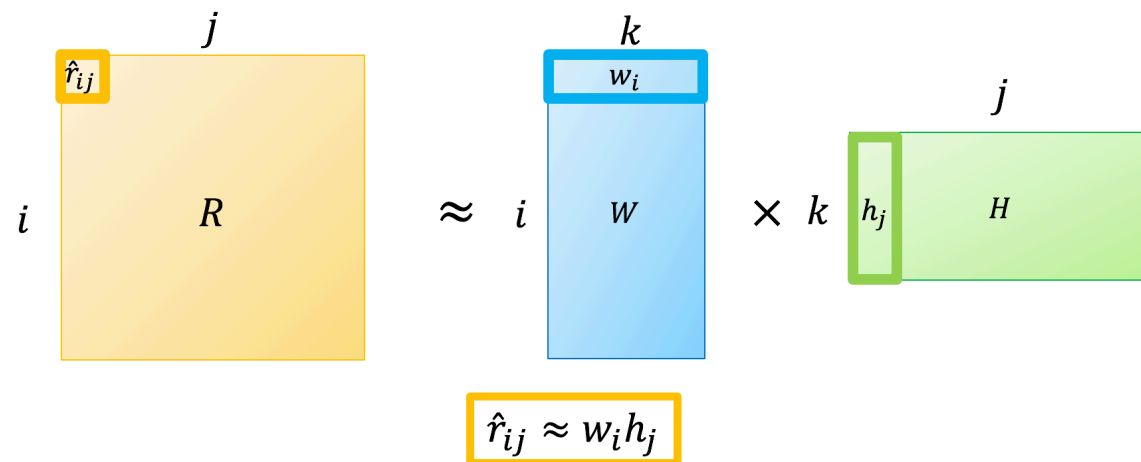
3. 行列分解の例

行列分解の例

- 確率的勾配降下法(SGD)
- 非負値行列分解(NMF)
- 特異値分解(SVD)

3.1 確率の勾配降下法(SGD)

SGDの更新式



- 式(1)を w_i と h_j で偏微分をしてあげる

$$f(W, H) = \frac{1}{2} \sum_{(i,j) \in D} (r_{ij} - w_i h_j)^2 + \frac{\lambda}{2} (\|W\|_F^2 + \|H\|_F^2) \quad (1)$$

- 1度の更新で w_i と h_j から式(1)偏微分後を引いてあげる

$$w_i \leftarrow w_i - \eta \{ \underbrace{-(r_{ij} - w_i h_j) h_j + \lambda w_i}_{w_i \text{ で微分した項}} \} \quad (2)$$

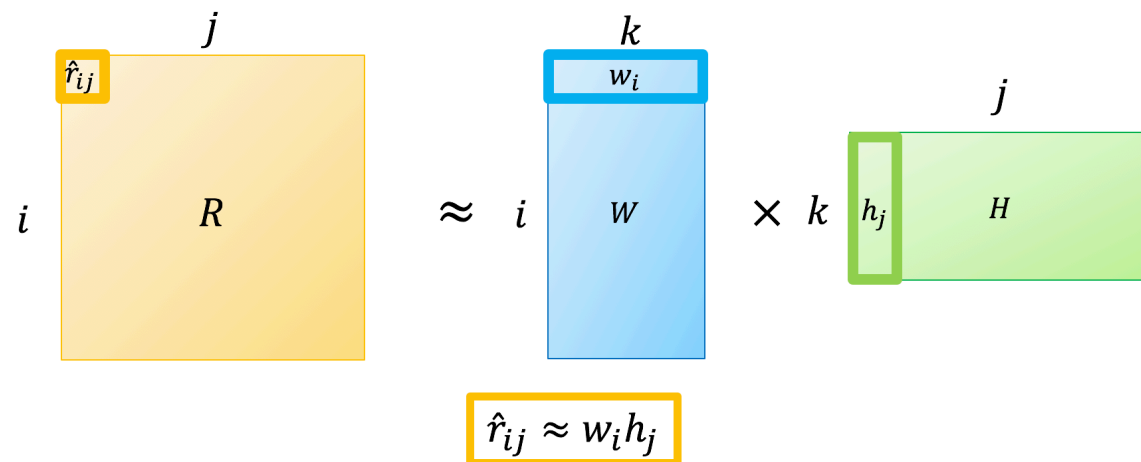
w_i で微分した項

$$h_j \leftarrow h_j - \eta \{ \underbrace{-(r_{ij} - w_i h_j) w_i + \lambda h_j}_{h_j \text{ で微分した項}} \} \quad (3)$$

h_j で微分した項

η : 学習率, λ : 正則化の度合を決めるパラメータ

具体例



$$w_i \leftarrow w_i - \eta \{ -(r_{ij} - w_i h_j) h_j^T + \lambda w_i \} \quad (2)$$

* W, H 行列の初期値はランダム値をいれたりする

$$\begin{aligned}
 w_i &\leftarrow w_i - \eta \{ (\hat{r}_{ij} - w_i h_j) * h_j^T + \lambda w_i \} \\
 &= w_i - \eta \{ (\hat{r}_{ij} - w_i h_j) * h_j^T + \lambda w_i \} \\
 &= w_i - \eta \{ \hat{r}_{ij} - w_i h_j * h_j^T + \lambda w_i \} \\
 &= w_i - \eta \{ (\hat{r}_{ij} - w_i h_j) * h_j^T + \lambda w_i \}
 \end{aligned}$$

3.2 非負值行列分解(NMF)

NMFの更新式

- 式(4)を最小にするような W, H を求める
 - W, H は非負値になるため制約つき
 - D は距離関数でユークリッド距離、KLダイバージェンスなど(今回はユークリッド距離の更新式を紹介)
 - イェンシェンの不等式を用いて算出する

$$W, H = \arg \min_{W, H} D(R|WH) , s. t. W_{i,k}, H_{kj} > 0 \quad - (4)$$

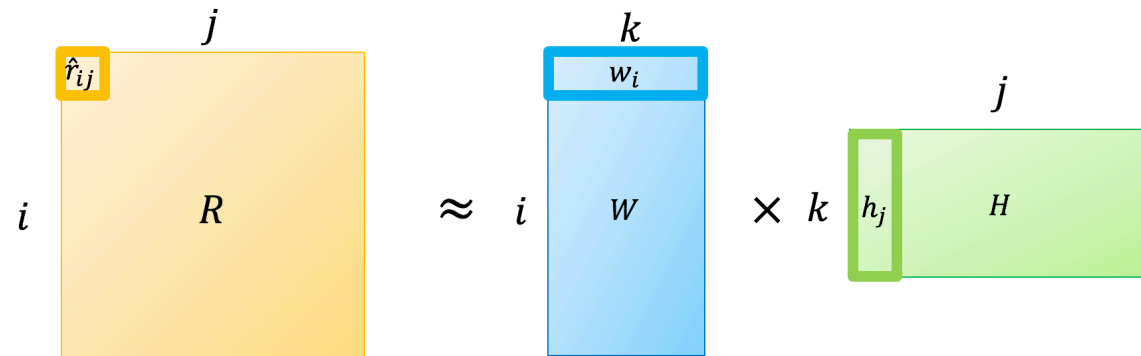
- 更新式

$$W_{i,k} \leftarrow W_{i,k} \frac{[RH^T]_{i,k}}{[WHH^T]_{i,k}} \quad - (5)$$

$$H_{k,j} \leftarrow H_{k,j} \frac{[W^T R]_{k,j}}{[W^T WH]_{k,j}} \quad - (6)$$

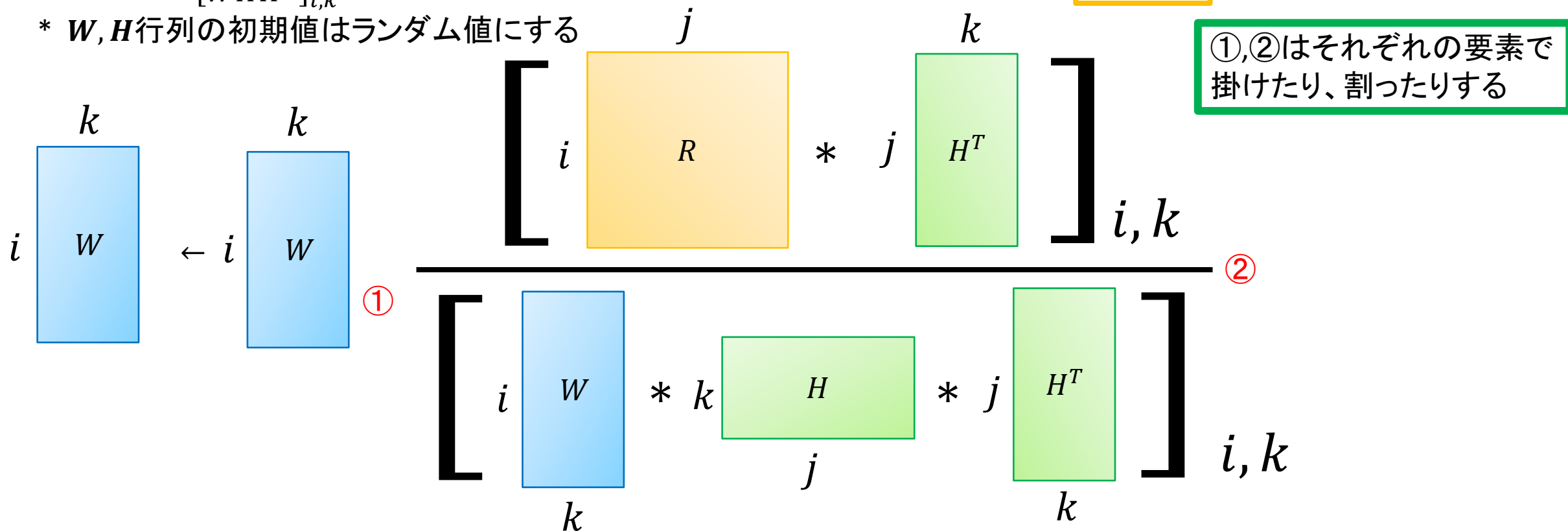
* $W_{i,k}$ のようにカンマで区切られている場合は i 行 k 列の行列と解釈してください

具体例



$$W_{i,k} \leftarrow W_{i,k} \frac{[RH^T]_{i,k}}{[WHH^T]_{i,k}} - (5)$$

* W, H 行列の初期値はランダム値にする

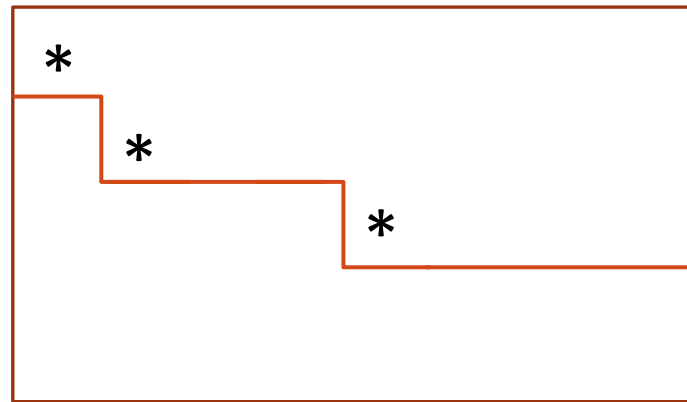


3.3 特異値分解

ランク

- 任意の行列 A を階段形にしたときに0でない行が残る数

行列 A



- *には0でない数が入っている。上の場合、 $\text{rank} A = 3$ になります

固有値,固有ベクトル

- 正方行列 A に0でないベクトル x ,スカラー λ の間に

$$Ax = \lambda x$$

- 上式が成立するような x を固有ベクトル,スカラー λ を固有値と呼ぶ
- 固有値,固有ベクトルの計算

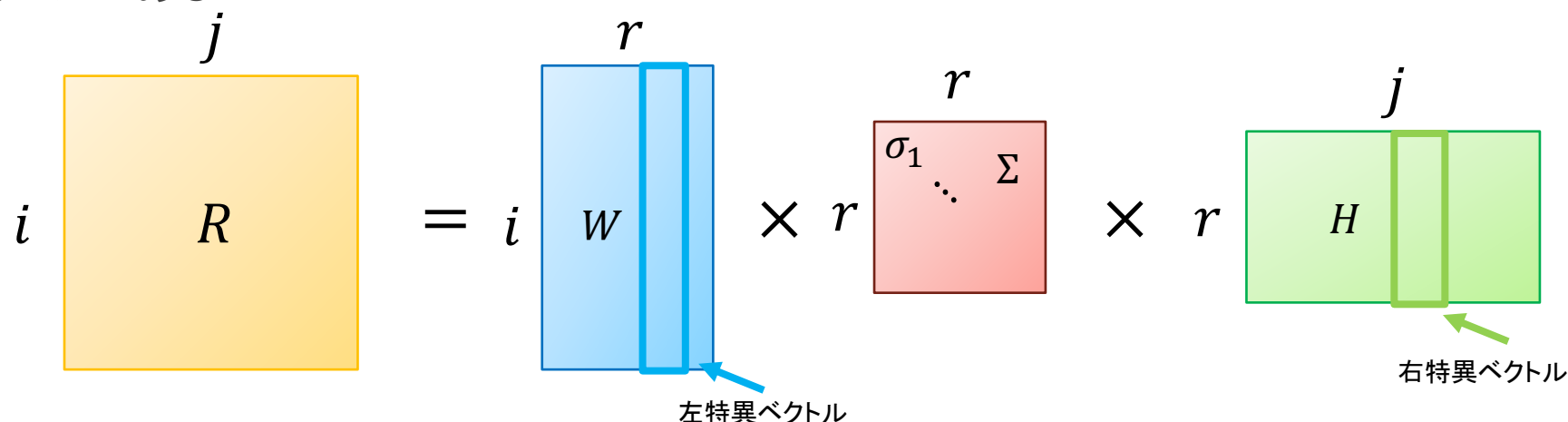
$$\lambda \text{が} A \text{の固有値} \iff \det(A - \lambda I) = 0$$

I は単位行列

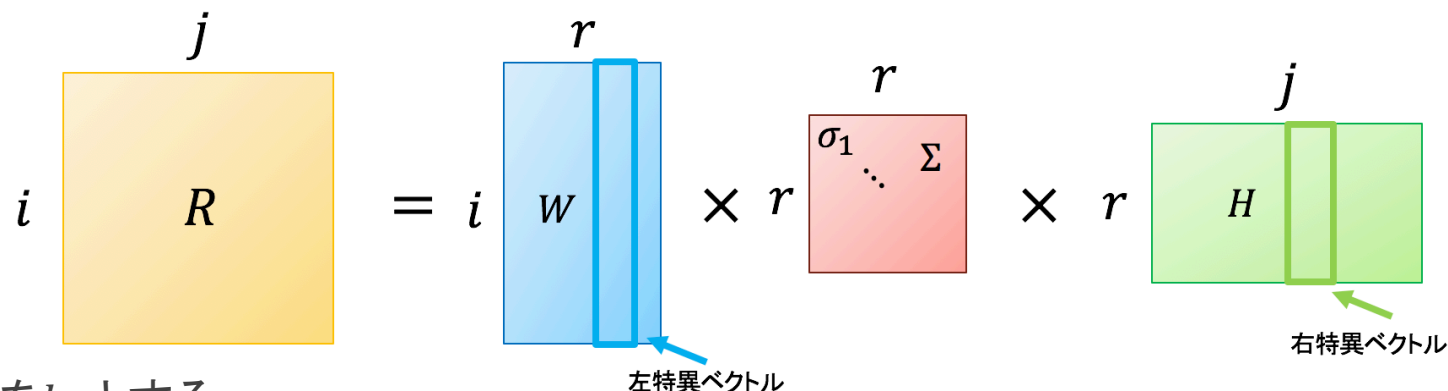
特異値分解

- 定義

- 行列 $R_{i,j}$ のランクを r とする
- この時、 $R_{i,j} = W_{i,r} \Sigma H_{r,j}$ に分解することを特異値分解と呼ぶ
- また、 $W^T W = H^T H = I$ になる。 I は単位行列
- Σ は対角行列で $\Sigma = \text{diag}(\sigma_1, \sigma_2, \dots, \sigma_r)$ である。 $(\sigma_1 \geq \sigma_2 \geq \dots \geq \sigma_r > 0)$
- $\sigma_1, \sigma_2, \dots, \sigma_r$ を特異値といい、特異値 σ_k の左特異ベクトルは W の第 k 列ベクトル、右特異ベクトルは H の第 k 列ベクトルである



特異値分解



- 特異値 σ_k において
 - 左特異ベクトルを w_k , 右特異ベクトルを h_k とする
- $Rh_k^T = \sigma_k w_k^T, R^T w_k = \sigma_k h_k^T$ ただし、 $w_k \neq 0, h_k^T \neq 0$
- σ_k は RR^T または $R^T R$ の固有値の正の平方根
- h_k は $R^T R$ の固有ベクトル
- w_k は RR^T の固有ベクトル

具体例

- 特異値分解の具体例

行列 $\mathbf{R} = \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 2 & 2 \\ 3 & 1 \end{pmatrix}$ の特異値分解をしてみよう

- 特異値分解の流れ

- 行列 \mathbf{R} のランクを求める
- $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有値の正の平方根を求める $\rightarrow \sigma_k$
- $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有ベクトルを求める $\rightarrow \mathbf{h}_k$
- $\mathbf{R} \mathbf{h}_k^T = \sigma_k \mathbf{w}_k$ を変形 $\frac{1}{\sigma_k} \mathbf{R} \mathbf{h}_k^T = \mathbf{w}_k$

- $\mathbf{R} \mathbf{h}_k^T = \sigma_k \mathbf{w}_k, \mathbf{R}^T \mathbf{w}_k = \sigma_k \mathbf{h}_k^T$ ただし、 $\mathbf{w}_k \neq 0, \mathbf{h}_k^T \neq 0$
- σ_k は $\mathbf{R} \mathbf{R}^T$ または $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有値の正の平方根
- \mathbf{h}_k は $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有ベクトル
- \mathbf{w}_k は $\mathbf{R} \mathbf{R}^T$ の固有ベクトル

具体例

- ランクを求める

$$\mathbf{R} = \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 2 & 2 \\ 3 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 0 & -4/3 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \text{なので } \text{rank} \mathbf{R} = 2$$

- $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有値,固有ベクトルを求める $\rightarrow \mathbf{h}_k$

$$\det(\mathbf{R}^T \mathbf{R} - \lambda \mathbf{I}) = 0$$

- 上式を計算すると $\lambda = 24, 4$ となる。よって、特異値 $\sigma_1 = 2\sqrt{6}, \sigma_2 = 2$
- また、固有ベクトル $\lambda = 24$ の時 $(\frac{1}{\sqrt{2}}, \frac{1}{\sqrt{2}})$, $\lambda = 4$ の時 $(-\frac{1}{\sqrt{2}}, \frac{1}{\sqrt{2}})$ それぞれ $\mathbf{h}_1, \mathbf{h}_2$ に対応する

- $\mathbf{R} \mathbf{h}_k^T = \sigma_k \mathbf{w}_k, \mathbf{R}^T \mathbf{w}_k = \sigma_k \mathbf{h}_k^T$ ただし、 $\mathbf{w}_k \neq 0, \mathbf{h}_k^T \neq 0$
- σ_k は $\mathbf{R} \mathbf{R}^T$ または $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有値の正の平方根
- \mathbf{h}_k は $\mathbf{R}^T \mathbf{R}$ の固有ベクトル
- \mathbf{w}_k は $\mathbf{R} \mathbf{R}^T$ の固有ベクトル

* 固有ベクトルの選び方が難しそう $\rightarrow \mathbf{W}^T \mathbf{W} = \mathbf{H}^T \mathbf{H} = \mathbf{I}$

具体例

- $Rh_k^T = \sigma_k w_k$ を変形 $\frac{1}{\sigma_k} Rh_k^T = w_k$
 - 上の式に今まで求めた値を代入すると求まる
 - $w_1 = (\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{1}{\sqrt{3}})$, $w_2 = (\frac{1}{\sqrt{2}}, 0, -\frac{1}{\sqrt{2}})$
 - あとは, この形にすれば特異値分解終了 $R_{i,j} = W_{i,r} \Sigma H_{r,j}$
- $Rh_k^T = \sigma_k w_k$, $R^T w_k = \sigma_k h_k^T$ ただし、 $w_k \neq 0, h_k^T \neq 0$
 - σ_k は RR^T または $R^T R$ の固有値の正の平方根
 - h_k は $R^T R$ の固有ベクトル
 - w_k は RR^T の固有ベクトル

$$\begin{aligned} R_{3,2} &= (w_1, w_2) \text{diag}(\sigma_1, \sigma_2) (h_1, h_2)^T \\ &= \begin{pmatrix} 1/\sqrt{3} & 1/\sqrt{2} \\ 1/\sqrt{3} & 0 \\ 1/\sqrt{3} & -1/\sqrt{2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2\sqrt{6} & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1/\sqrt{2} & 1/\sqrt{2} \\ -1/\sqrt{2} & 1/\sqrt{2} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

行列分解をする上での注意点

- 行列分解では行列を k 次元に圧縮できる
 - SGDやNMFでは分解対象の行列の行数や列数よりも多く指定してはならない
 - SVDでは、ランク以上の行数や列数を指定することはできない(特異値分解は特異値の大きい値から使うらしい)
- 行列の要素が空の場合(欠損値)が発生する可能性
 - SGDは欠損値を無視して更新することは一応できる
 - NMFやSVDは欠損値を無視することはできない

4. 欠損値の扱い

欠損値の扱い

- 表のようなユーザ×アイテム行列
 - Eコマースを想定して、userに対してitemの評価値が入っているものとする
 - user1はitem4の評価値を付けていない
 - レビュー×語彙行列のように現れていないから「0」というようにするのは安易
- たとえば
 - (user1,item4)の要素にuser1の評価の平均値に入れてあげたりする(これも安易だが、、、)

	item1	item2	item3	item4	item5
user1	3	1	5	-	-
user2	4	-	1	2	1
user3	3	-	5	-	-

ご静聴ありがとうございました

参考文献

- [集合知プログラミング](オライリー本)
- [ビッグデータの計算科学 第3-4回 線形代数の基礎](<http://www.iedu.i.kyoto-u.ac.jp/uploads/20141022.pdf#search=%27%E7%89%B9%E7%95%B0%E5%80%A4+%E6%B1%82%E3%82%81%E6%96%B9%27>)
- [高校数学の美しい物語] [<http://mathtrain.jp>]